

経済思想家としてのデイヴィッド・ヒューム（Ⅰ）

別 府 芳 雄

まえがき

ヒュームが有名な『人性論』（A Treatise of Human Nature）の著者であり、かつアダム・スミスの親友であったことは周知の事実である。ヒュームは18世紀のスコットランド生れの哲学者兼経済学者であるが——この優れた経済思想家としてのヒュームの側面が意外にも見落され（または軽視され）ている感じが多い。確かに、カントにしても『プロレゴメーナ』——およそ学として現われ得る限りの将来の形而上学のための序論——“*Prolegomena*” zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können (1783) ——の序文（Vorrede）で、「私は率直に告白するが、………デイヴィッド・ヒュームの警告こそ、十数年前に初めて私を独断論の微睡（dogmatischer Schlummer）から眼ざめさせ、思弁哲学の領域における私の研究（meine Untersuchungen im Felde der spekulativen Philosophie）に、それまでとは、まったく異なる方向（eine ganz andere Richtung）を与えてくれたところのもの」と述べているのをみると、哲学者としてのヒュームが偉大であり、カントに与えた影響も多大なものがあったということがわかる。（○印引用者）。カントの『純粹理性批判』（Kritik der reinen Vernunft）（1781）を「ヒュームに対するカントの回答」（B・ラッセル）とみる哲学者も多いのは事実である。だがしかし、ヒュームはたんに哲学者であったばかりではない。J・ベンサム（Jeremy Bentham 1748～1832）だって、その『政府論断

章』 (Fragment on Government) で「ヒュームの『人性論』では、あらゆる徳の基礎が功利におかれるということが、極めて力強い証拠によって論証されている……私はよく覚えているが、その著作のうちで、この問題に触れている部分を読むやいなや、私はあたかも鱗が眼から落ちたかのように感じた。私はそのとき初めて、人民の問題を徳の問題と呼ぶことを学んだのである云々」と述べ、ベンサムがヒュームの『人性論』第3巻 (A Treatise of Human Nature, Book III) を読んで「突然眼から鱗 (うろこ) が落ちたように感じた」感激を述懐しているくらいで——「ヒュームの倫理思想に含まれていた功利主義的側面が、名実ともに、ヒュームからベンサムにバトン・タッチされた」(山田英世氏・印引用者) 事実を窺知しうるのである。経済思想家としてのヒュームは、たんに重商主義政策の強力な反対論者 (forceful opponent of mercantilism) であったのみならず——ハイマン (Heimann) は「彼〔ヒューム〕ほど、われわれがマーカントィリストの歴史的な業績 (the mercantilists' historic achievement) を評価するために用いた“かの貨幣のダイナミックな解釈” (dynamic interpretation of money) を展開するのに、あずかって力のあったものはないばかりか、ヒュームの“インフレーションの効果についての分析” (analysis of the effects of inflation) などは、いちばん優れたもの、であり、とくに Time-lag (時間のずれ) の問題については、すぐれた研究を残した経済思想家であった。ヒュームは、事業活動 (business activity) の刺激剤としてのインフレーションの効果を正確に判断し、徐々なるインフレーションによって“永遠の繁栄” (permanent prosperity) を期待した最初の人物でもあった。だから、ヒュームは彼の後継者を“一世紀以上も先に抜いていた” (*Hume surpassed his successors for more than a century*) 経済思想家であったといいうるし、国際貿易理論 (the theory of international trade) でも、彼の利子学説 (his doctrine of interest) にしても、ヒュームは極めて“注目すべき研究”を残している。社会経済学

経済思想家としてのディヴィッド・ヒューム(I)
的 (socio-economic) な推論で、これほどすばらしいものは、ちょっと見
当らない」と絶賛している。(。印引用者)。ヒュームはこれほど優れた研究
を残した経済思想家であった。また、ヒュームは大著『英国史』(History
of England, 6 vols. 1754~62) (国家機構の発展に注目した最初の近代
的な史書といわれるもの) の著作者として、すぐれた歴史学者でもあった
し、ロバート・ウォレス (Robert Wallace) との間で、『人口論争』を展開
した一流の人口学者でもあった。

だからシュムペーターも『経済学史』のなかで、「確かにヒュームは 18
世紀前半の惰眠の後に訪れた興隆の先端に立つ」(。印引用者) とヒュー
ムを高く評価している。

小論は——主として——“経済思想家としてのヒューム”について述べて
みたいと思う。

Ⅰ. ヒュームの生涯

ヒュームの生涯について述べる前に、少しく、リチャード・カンティヨ
ン (Richard Cantillon 1697~1734) について簡単に触れておく必要があ
る。[理由はあとで述べる]。

[Ⅰ] . カンティヨンはアイルランド生れのイギリス銀行家であり、国
際的な金融家 (Irish-born British banker and international financier)
で、1697 年頃、ケリー (Kerry) で生れた。1716 年、フランスのパリに
赴いて銀行 (banking house) を設立し、金融業に従事し、ローの計画の
失敗を予想し、株式投機で大儲けをした。[カンティヨンの幼少時のこと
は全くわからない]。その後、ロンドンに移住したが、1734 年 5 月 14 日、
暗殺者 (assassins) のため不慮の死を遂げる。[以前の召使いによる放火
説もある]、また、彼の遺書『商業本質論』(Essai sur la nature du
commerce en général. 1755) は、カンティヨンの死後 21 年もたって、

1755年に発見され、イギリスの経済学者ジェヴォンズ (William Stanley Jevons) から“経済学のゆりかご” (cradle of political economy) と賞讃された。早世したカンティオンは、たった1冊の著書しか残さなかったが、本書こそ、まさしく「賞讃すべき開拓者の書物」¹⁾ (c'est le livre d'un admirable pionnier) なのである。というのは「ペティ (Petty) と同じように、カンティオンは、人間社会 (la société humaine) は自然法則 (loi naturele) に従うと信じ、その法則を説明しようとした。何よりも、J. ローの貨幣論 (les idées monétaires de Law) に反対して書かれた、この論述の中に、われわれは今日においてもなお、富の性質について (sur la nature de la richesse)、価値について、分配について (sur la valeur et sur la répartition) の研究を参照して役立てる²⁾」ことができるからである。本書は、経済学の全分野にわたって、体系的な論述をおこなっているほか、実質価値 (real or intrinsic value) という言葉を初めて使っている点など注目すべき書物である。また、本書には、アダム・スミスの賃金にかんする理論 (Adam Smith's theory of wages) の萌芽 (germ) が認められる。カンティオンは通貨は紙幣 (paper) にしろ、铸貨 (coin) にしろ、国富の真の尺度とはならない。土地のみが、“富の源泉” (the source of wealth) であることを提唱する。すなわち「土地は人がそこから富をひき出すところの素材あるいは源泉である。労働はそれを生産する形態である 《*La terre est la source de la matière d'où l'on tire la richesse; le travail est la forme qui la produit*》³⁾」と述べ、なかんずく、“土地という要因” 《le facteur “terre”》 が最も重要な役割をもつ、と断定する⁴⁾。これは、重農学派の理論 (the physiocratic doctorines) の基礎となっていくもので、ケネーなども、土地をこのように理解し認識することになる。重ねていうと——富を定義するに当って、カンティオンは16世紀の貴金属至上主義の錯覚 (illusions chrysohédoniques du XVI^e siècle) を明確に提唱し、重商主義を批判する。すなわち「貨幣 (l'argent)

経済思想家としてのデイヴィッド・ヒューム(I)

は窮迫時のための準備であり，その豊富は致富の刺激剤 (un stimulant de l'enrichissement) にすぎないものなのだ」と。つまりカンティヨンによると「もしその国が自然的に富んでいれば，貿易差額が逆調になることがあっても，それはほんの一時的なことに過ぎない。やがて新たに金 (d'or) が流入し，生産力の増加に対応して，繁栄への立直りが立証されるであろう。貨幣の豊富 (L'abondance de la monnaie) は生産活動を刺激する⁵⁾ ものなのだという。またカンティヨンの著作のなかには「彼を近代思想の先駆者 (précurseur) たらしめた価値論 (une théorie de la valeur⁶⁾)」もある。だから彼の経済思想史上の位置は「偉大な前古典主義者たちの最後の人 (le dernier des grands auteurs pré-classiques) であり，同時に古典主義経済学者たちに……その解答について重要な問題を提供していった人⁷⁾」でもあった。つまり「カンティヨンはその経済思想をむしろイギリスの経済学者たち，とくにペティ (William Petty) から受け継いでいた。カンティヨンは，その著書の冒頭に＜土地は富の引き出される源泉あるいは素材であり，人間の労働はそれを生産する形態であって，富それ自身は生活の糧，便宜品および享樂品にほかならない＞という富とその源泉に関する有名な命題を掲げていたが，この命題より出発して，ペティに倣 (なら) い，商品の価値を，その生産に要する土地および労働の2実体に帰し，さらに，これらの価値の2実体の等化をはかって，価値の実体である労働を結局，土地に還元していった。これによって彼の学説は，ペティとは反対に，富および価値の源泉の土地一論説となり，重農主義学説の根流となった。ケネーはその学説の根本思想のみならず，その“経済表”の着想をもカンティヨンから学んでいたのである⁸⁾」だから，カンティヨンの『商業本質論』こそ「経済学の発祥地」(cradle of political economy) であり，まことに「賞讃すべき開拓者の書物」(le livre d'un admirable pionnier) だったのである。

ところで，カンティヨンがロンドン在住のとき，なぜ，わざわざフラン

ス語で執筆したのか、なぜ、カンティヨンの名著の出版が死後 21 年も遅れたのか、などという理由については、まだ釈然としない点が多いが——とにかく、1881 年になってから、W.S. ジェヴォンズ (William Stanley Jevons) によって再発見され、1931 年に、ヘンリ・ヒッグス (Henry Higgs) の手で、英仏両国語で再刊されるにいたったものであるが——重要なことは次の点である。カンティヨンの著作が発見されるまでは、「経済学における多くの、すぐれた考えは、スミスよりも年上の友人、ディヴィッド・ヒューム (D. Hume) のものとされていた。カンティヨンの遺著 (posthumous book) は、ヒューム自身の著作よりも、おくれではじめて出版されたのであるが——もちろんそれより遙か前に書かれていたのであるから——今では、ヒュームの手柄 (credit) は、この彼より年長のカンティヨンとわかつたねばならないか、あるいはカンティヨンの未刊の稿は 16 年もフランスに埋もれていたものであり——想像されるようにヒュームがフランスを旅行したときに、これを読んだとするならば、功績はカンティヨンのものとならねばならない」⁹⁾ のだから筆者がヒュームを述べるに先立ってカンティヨンに触れておく理由はこのためである。ヒュームは「カンティヨンと同じく重商主義の強力な反対論者」である。確かに「インフレーションの効果についてヒュームの与えた分析は優れたもの」であり、なかでも「国際貿易 (international trade) の理論では、ヒュームはカンティヨンを超えて先に進んでいた」¹⁰⁾ 点もあるが、しかし練達な銀行家であったカンティヨンの著作が、ヒュームの経済思想と類似した内容をもつと感ぜられる点が少くない。

もう一つ、カンティヨンの人口理論についても付言しておかねばならないことがある。マーカンティリストたちは、「一国の繁栄がその人口増加によって制約される (*la prospérité d'un pays est conditionnée par le développement de sa population*)」¹¹⁾ と簡単に考えていたようであったが、(むしろ、ジャマリア・オルテス (Giammaria Ortes) のような例外もある

が)——カンティオンは「人間は生活資料に制限がなければ、人間は納屋のねずみのごとく増加するものだ」(*men multiply like mice in a barn, if they have the means of subsistence without limit*) という有名な言葉を述べている。それどころか、カンティオンは人口問題の観点から経済や産業の発展を考えようとする。つまり、「彼〔カンティオン〕は、人口問題の観点から外国貿易をとりあげ、一国の経済が外国貿易にたよるようになると、それだけ多くの人口を支えうるにいたること¹²⁾」に早くも着眼している。いいかえると、カンティオンの人口思想は「例の鋭さ (his usual perspicacity) をもって、すでに早くから、この線に沿って考えをすすめていた。彼はかなり楽観的に、人口増加が規制されていく様式に着眼していた。つまり、いろいろの階級の婚姻の風習 (the marrying habits) というものは、彼らの生活水準 (living standards) に応ずるものであって、生活水準を維持しうるようにできている。換言すれば、増殖率 (the rate of propagation) を人間が慎重な考慮にもとづいて——おのずからきめる事柄 (a matter of deliberate decision)¹³⁾」だと考えていた」点は極めて注目されねばならない。「習慣 habits という概念はヒュームにとって、『人性論』の重要な概念となる。また、カンティオンが、いかにヒュームに先んじて、人口問題に着眼していたか——カンティオンの先行性 (または先導性) に注目する必要がある。また、人間の“増殖率”は人間が各自“慎重な考慮の結果”きめるべきこと、としたことは、のちにマルサスに伝わっていく」。この点について、南亮三郎博士の解説によると、「18世紀は、さすがに人口思想の著しい前進をなし遂(と)げた。すなわち、この世紀に入ると、まず<均衡>が2つの側面から深化された。1は、かかる均衡をもたらす<妨げ>の性質および種類にかんしてであって……18世紀中葉の有名な人口論争として記憶せられるヒューム対ウォレスの古代社会の人口稠密についての論争が、この点の観察を著しく深めるにいたった。いまひとつは、生存資料への人口の依存関係そのものであって、数奇の運

命の人カント・ジョンがこの点を鮮やかに説明した。すなわち彼は、その死の直前に書いたものと推定され、死後 21 年目に発見刊行された『商業本質論』(Essai sur la Nature du Commerce en Général. Londres-Paris. 1755) という著作のなかで、動植物および人間の無限増殖の傾向を説き、その根柢となっているものは生存資料であって、人口増加は、この生存資料の存在量につねに平衡化しなければならぬ所以(ゆえん)を論じた。ここでは、まさに＜均衡＞思想が人口理論の主座に坐っている。しかし＜妨げ＞の論は極めて稀薄であるばかりでなく、＜均衡＞そのものが甚だ静止的に考えられ、人口増加によるその＜攪乱＞は彼の意識にのぼっていなかった。この点が大切である。カント・ジョンの発見者ジェヴォンズは、カント・ジョンの人口思想を重視して、これこそ＜マルサス的人口理論に、ほとんど完全に先鞭をつけたもの＞と称し、人口を論じた、この著作、第 5 章こそ＜簡単にマルサスの有名な論著をあらかじめ 27 頁に要約しておいたものに他ならない＞と極言¹⁴⁾している」と述べておられる。それほどカント・ジョンの著作は優れたものであり、卓見にみちたものであった。だから、もしヒュームの経済学上の見解が——ハイマンのいうように——老練な銀行家カント・ジョンと“功をわかちあうべきもの”あるいは“功績はカント・ジョンに帰すべきもの”とするならば、——ヒュームを論ずるに当たって、まずカント・ジョンに触れておかねばならない理由が解って戴けるであろうし、筆者がカント・ジョンについて簡単に触れておいた理由もそのためである。では以下、ヒュームそのひとの生涯について述べよう。

〔II〕 . ヒューム (Hume David) は、1711 年 4 月 26 日、エジンバラ市のトロン教会区で生まれた。父はスコットランドの東南部でイングランドと境を接しているベリックシャー (Berwickshire) のナインウェルズ (Ninewells) の小地主ヨゼフ・ヒューム (Joseph Hume) である。彼は第 2 子であった。ヒュームは 2 才の時に、父を失い、母の手で育てあげられた。もともと彼の家は「スコットランドの名門・ヒューム伯爵家 (the

Earl of Home's or Hume's) の支族で、16 世紀以来、ナインウェルズを領有していたという。しかし、ヒューム自身は、自分は地方ジェントリ (the small gentry of Scotland) 層の出身であり、富裕な家ではなかったと述べている¹⁵⁾。また「スコットランドに固有のカルヴィン派の長老派教会——いわゆるカーク (Kirk) ——の陰うつで厳格な性格は、ヒュームの啓示宗教に対する敵意をかきたてた原因ではなかったか¹⁶⁾」といわれる。というのは、一族は徹底した長老教会派でカルヴィン主義の神学を徹底的に、この少年に注入したからである。

ヒュームの生れる 4 年前、つまり 1707 年、イングランドとスコットランドが合同して＜大ブリテン連合王国＞が成立した。ヒュームは、12 才のとき、兄〔ジョン・ヒューム〕と一緒にエジンバラ大学で法律学を学んだが、間もなく文学と哲学を志すようになる。「当時の学生の大半は 2 年間で主として古典的教養を学ぶと、卒業せずに大学を去ったが、ヒュームもそうだったらしい¹⁷⁾」と大槻氏は説明している。しかしヒュームは、早くも、ニュートンの自然研究の態度、方法を正規の授業として学んでいる。つまり、イギリス啓蒙主義哲学 (die englische Aufklärungsphilosophie) のうちで「ロック (Locke) はイングランドで、バークリ (Berkely) はアイルランドから出た。3 番目のディヴィッド・ヒューム (David Hume) は、スコットランド出身¹⁸⁾」ということになる。

1729 年 (ヒューム 18 才時) 頃、ヒュームは学問に対する余りにも“強烈な傾倒” (ardent application) のため心身の健康をそこなうまでにいたった。病気は“うつ病”であったが 5 年間も続いた。大島正徳氏は、「ヒュームが、他人に対しては、善良ではあるが、何となく間が抜けているというような風を、しばしば示していたので、友達仲間から、何となくポカンとしているような人柄にみえた。であるから、友達に交わっても、常にだんまり屋の方であって、社交生活としても、なんら他奇なきありさまで……外面からみると、うかつなとんまの人柄のようにみえた。しかし

極めて好人物であったので、後年においては、パリの社交界にもて囃^{はや}されたことなどもあるが、それは快活に談論風発するところからではなく、変り者・お人好しの人としてもてたようであった。（新カナ使いに改む。以下同¹⁹⁾じ）」と解説している。ヒュームは生計上の必要（彼は次男であり、遺産の分け前は僅か「年収 80 ポンド」だったから、1734 年春（23 才時）、イングランド西部の港町ブリストル（Bristol）の商社につとめたが、——ヒュームの“商売経験”は不成功で——数ヶ月で止めてしまって、1734 年、フランスに渡った。「ブリストルでヒュームは自分の姓の綴りを Home から Hume に改める」。彼は、はじめパリに行ったが、そののちライム（Rheims）という古い町に数ヶ月いて、ラ・フレーシュ（La Flèche）「パリ西南方 150 マイルのところ」に 1737 年 8 月末まで滞在した。ラ・フレーシュには、ゼスイット教の学校があったが、125 年以前に、哲学者のデカルト（Descartes）が、そこで教育をうけた、ゆ[○]か[○]りの地であった。ここでヒュームは処女作『人性論』（A Treatise of Human Nature）の執筆に専心した。そしてヒュームは、——原稿を活字にするという希望を抱いて、1737 年 9 月イギリスに帰った。1739 年正月（ヒューム 28 才時）に『人性論』の最初の 2 篇（第 1 巻と第 2 巻つまり第 1 篇、知性について Book 1. Of the Understanding. と第 2 篇、情念について Book II. Of the Passions.）がジョン・ヌーン（Noone）書店から匿名で出版されることになったのである。B・ラッセルは「ヒュームの主著『人性論』は、1734 年から 1737 年にいたる間、彼がフランスに住んでいた時に書かれ「執筆され」たものである。最初の 2 巻は、1739 年に出版され、第 3 巻は 1740 年に公刊されている。彼は、まだ 30 代にならない非常に若い青年だったのであり、まだ有名でもなく、彼の到達した諸結論は、ほと[○]んどすべての学派が歓迎しないようなもの（almost all schools would find unwelcome²⁰⁾）」だったと述べている。つまりヒュームの『人性論』には、誰も見向きもしなかったし、「好評が起るところか、悪評も起らず、

実際のところ一つも売れな²¹⁾かった」ので、ヒューム自身が期待したような反響はまったくえられなかった。絶望したヒュームが「印刷機械から死産するという憂き目にあった」(it fell dead-born from the press)と述懐したのは、この時である。ヒュームはその当時みずから慰めて、「この本〔人性論〕は、ついに売れずに終るかも知れぬ。しかし抽象的な問題を反省する習慣のある人は、おおむね偏見に充ちている人である。偏見に充ちていない人は、こんな形而上学的理論について親しんではない。自分の原理は、その問題の性質上、俗人の気持からは、甚だ遠ざかっているものである。もし、この問題がわかったならば、哲学上根本的な革命が生ずるであろうが……そういう革命は容易に生ずるものではない²²⁾」と述べている。そこでヒュームは『人性論』の抄録をつくり「“普通の読者にもっと理解しやすくする”ことを目的として、ふたたび無署名でパンフレットを書き、1740年に刊行した。これが『人性論抜粋』(An Abstract of A Treatise of Human Nature)である。しかし不幸にも『抜粋』もまた『人性論』と同じ運命に²³⁾あってしまう。『人性論』でヒュームが主張していることは——ヒュームによると「昔から、われわれに伝えられた道徳哲学は全く仮定的である。経験にもとずいていない。勝手に考えられたもので、人性がいかなるものであるかを、よく攻究していない。しかし、人性の何たるか、から研究することが、一番大切で、道徳的結論は、この研究にもとずかねばならない。したがって、自分はこれを私の主な研究とすることに決めた²⁴⁾」のだ、と述べているが、ヒュームの考え方がいわゆる“懐疑的”なために、当時の常識人の考え方とは、違う。だから出版当時では、世人に理解しにくかったに違いない。だがしかし、ヒュームは、ただちにその打撃から立ちなおって、1740年11月(29才時)に、『人性論』の第3篇をハチスン(Hutcheson)の助力でロングマン(Longmann)書店から出版することになるのだが、この第3篇、道徳について Book III. Of Morals の出版については次のような事情があった。その事情というの

は、ヒュームは道德問題を取り扱うにあたって、「ホッブス (Hobbes) 以来の英国哲学者が熱心に開拓した同じ分野に入り込んだのである。そして、ことにフランシス・ハチソン (F. Hucheson) の論文には、彼の関心が注がれた。そこで、彼は有名なるグラスゴー大学の慈愛同情感を主張する道德学者すなわちハチソンに、意見を求めるために、その草稿を送った。兩人の間には興味ある文通がおこなわれたが、その当時、はしなくもヒュームはアダム・スミス (A. Smith) と知己となることができた。その当時スミスはグラスゴーのまだ学生であって、17才になったばかりであった。これもハチソンの紹介によってであるが、その『人性論』の1冊をスミスに贈ったことによっても、アダム・スミスの学才がいかに認められていたかがわかる。この第3巻は、ハチソンの紹介で、ロングマン (Longmann) から出版されることになった。1740年のこと²⁵⁾であった。そのあと、ヒュームは『人性論』の続篇のために書いた原稿をもとにして、政治、経済、社会をテーマにして、一群の論文を書き、これを集めて1742年初め (ヒューム31才時) に、『道德・政治論集』 (Essays, Moral and Political) と題して、匿名で、エジンバラで公刊した。この著作は成功で、1742年夏には、早くも第2版を出すにいたった。ヒュームは「この道德論のうちに、道德現象を解釈する原理として効用 (utility) という考えを入れたのであって、のちの功利主義の根本原理をなすものであるが、ここに倫理学史上の一境界線を明確にした²⁶⁾」とというるし、——われわれはアダム・スミスが“経済学之父”であることは熟知しているが、スミスの経済思想が、こういう径路を経て、生まれてきたものであることをあらためて痛感しうるのである。

ところでヒュームは定収をうる必要上、「1744年に、エジンバラ大学の教授になろうと試みたが、それに失敗してから、まず、ある狂人の家庭教師 (tutor to a lunatic) となり、次いで、ある将軍の秘書 (secretary to a general) となった。それからの信任状 (credentials) から意を強くした

彼は、再び哲学の中に雄飛を試みた。〔つまり〕、『人性論』の最良の部分 (the best parts) を割愛し、さまざまな結論の根拠づけを大部省略して、その著書を短かくした結果『人間悟性論』 (Inquiry of Human Understanding) ができあがった。〔のちに、An Enquiry concerning Human Understanding と改題される〕。この著作は長らくの間『人性論』より、はるかに有名 (much better known) だったのである。カントを、その〈独断的なまどろみ〉 (dogmatic slumbers) から眼覚めさせたのは、まさに、この著作『人間悟性論』²⁷⁾ だったのである。つまり、ヒュームは、エジンバラ大学の倫理・精神哲学のポストをえられなかったので、「ヒュームは若きアナンデイル侯爵 (the Marquis of Annandale) の個人教授の職を引きうけることとなった。この職は経済的にヒュームを潤した〔年俸 300 ポンド〕が、侯爵は明らかに狂人であり、ヒュームの役目はチューターというよりも看視〔護〕人²⁸⁾にふさわしかった」というべきものであったようである。のみならず、侯爵家の家事は万事ヴィンセント大尉 (Captain Vinsent) が切り廻し、ヒュームとの間に不快なトラブルがあった。幸いなことに——タッタ 1 ケ年で——1746 年 4 月 (ヒューム 35 才時) に、侯爵から解雇通告で、この“狂人看護”の仕事から解放されることができた。ただ、この仕事は、豊富な時間的余裕をヒュームに与えた。そこでヒュームは彼を“懷疑主義”とか、“異端”とかいう一般の批判に答えるために「一紳士からエジンバラの友人あての書簡」 (A Letter from a Gentleman to his Friend in Edinburge, 1745.) というパンフレットを書いた。

次に、ヒュームは、遠縁に当るセント・クレア將軍 (General St. Clair) から、彼の軍事遠征に秘書として同行するように勧められて、これに応じた。しかも「セント・クレア將軍の知遇をえたことは無駄でなく、1748 年 (ヒューム 37 才時) に、再度ヒュームは彼に従い、今度は密命を帯びた軍事使節団の副官 (aide-de-camp) として、ウィーン

(Vienna) やトリノ (Turin) に出向する。この動きは同盟軍に働きかけて、オーストリア継承戦役を自国に有利に導びくことを目的としたといわれ、ヒュームは士官の制服〔真紅の制服〕を身にまとうようになる。そして、この職は、ヒュームを財政的に独立させ、彼の生涯のもう一つの宿願をもかなえた²⁹⁾のである。“もう一つの宿願”というのは、ヒュームの『人間悟性論』 (Essays concerning Human Understanding) (論集第2巻) は、彼がトリノ (Turin) に赴任中に執筆しえたもので、この『人間悟性論』は、のちに『人間悟性研究』 (An Enquiry concerning Human Understanding) と改題され、主著の『人性論』より、はるかに長い間、一般に親しまれたものである。引続いて彼は主著『人性論』を改作して「道徳・原理研究」(論集第3巻) (An Enquiry concerning the principles of Morals. 1751), 「政治論集」(論集第4巻) (Political Discourses, 1752.), 「4論文集」(論集第5巻) (Four Dissertations, 1757.) を公刊することによって、死産した『人性論』をスッカリ復活させてしまった。因みに、このうちの『政治論集』は1752年2月、300ページ余りのオクターヴ版一巻として、エジンバラで独立に出版されているが、ヒューム自身、誇らかに「わたくしの著作のうち、初版で成功をかちえることのできた唯一の著作であり、外国でも本国でも好評であったもの」と述べている。本書は、[○]ア[○]ダ[○]ム・ス[○]ミ[○]スの『国富論』の[○]先[○]駆[○]をなすものといわれているが、この『政治論集』 (Political Discourses) のなかでは『道徳・政治論集』での政治問題が引き続き論ぜられるほか、「＜王位継承について＞ Of the Protestant Succession), ＜理想共和国についての一案＞ (Idea of a Perfect Commonwealth), ＜勢力の均衡について＞ (Of the Balance of Power) のほか、はじめてかれの経済学的見解を表明する諸論文、すなわち＜商業について＞ (Of Commerce), ＜奢侈について＞ (Of Luxury), ＜貨幣について＞ (Of Money), ＜貿易差額について＞ (Of the Balance of Trade), ＜祖税について＞ (Of Taxes), ＜国家信用について＞ (Of

Public Credit) および〈古代諸国民の人口について〉(Of the Populousness of Ancient Nations) 等が公表³⁰⁾されている。この『政治論集』が出た年、つまり、1752年(ヒューム、41才時)、ヒュームは、今度はグラスゴー大学の倫理学の教授を求めたが、望みはえられず、エジンバラで法曹会図書館長(大野氏は法曹会司書と書いている)の地位につくことができた。〔年俸40ポンド〕。ここで彼は、歴史研究に専心して、研究の結果を『英国史』(The History of England. 1754~61)として公刊した。まず1754年秋(ヒューム43才時)に、『英国史』第1巻(前期ステュアート期)が出版される。この書物は彼を有名にし、また裕福にする。というのは彼はすでに、一流の史家として知られるようになるからである。杖下氏の解説によると「文筆の士としてのヒュームの名を当時において決定的にした『英国史』全6巻についていえば彼が扱った時代は前後するが、54年(扱った年代は1602年~49年)、55年(1649~89)、58年(1485~1603)とその各部分がそれぞれ刊行されている……この書こそは、ヒュームの名声をたかめるとともに、後には驚くほど版を重ね、彼を財政的に豊かにした³¹⁾」のだという。1761年の第5巻と第6巻では、ジュリア、シーザーによるブリタニア侵攻から1485年のヘンリ7世の即位まで、を扱っている。してみると、ヒュームは時代を逆行して『英国史』を書いていったことになる。ヴォルテールをして“例をみない歴史書の傑作”といわしめたのは、このヒュームの『英国史』のことである。

1757年(ヒューム46才時)に、彼は法曹会図書館長を辞(や)め、同年「宗教の自然史」(Natural History of Religion)〔そもそも、どうして人間は信仰を抱くようになったのか、という問題について論じたもの〕を公刊した。『英国史』全6巻の出版は、1762年(ヒューム51才時)に完了している。

彼の最後の著作『自然宗教にかんする対話』(Dialogues concerning Religion)〔——もっとも破壊的で不敬な言辞が多い〕は、この頃までに

書かれたものであったが、生前には出版されず、ヒュームの死後、——3年後の1779年に、遺著として (posthumously) 出版されたものである。

1763年 (ヒューム, 52才時) 以降, ヒュームは, フランスへの新大使ハートフォード卿 (Hertford) の個人的秘書〔年俸200ポンド, 終身年金〕として, 再び, パリに滞在することになった。1765年 (ヒューム, 54才時) には, 大使館付秘書官となり, ハートフォード卿の帰国とともに, 新任大使の着任まで, 大使代理 (Chargé d'Affaires) を務めた。当時, パリにおけるヒュームの文学的名声は異常なくらいで, 「ヒューム自身が驚いたことは, 彼の著述, とりわけ『英国史』によってヒュームはフランス人に天才とみなされ, また当時のフランス英国崇拝の傾向も手伝ってか, 名士の扱いをうけた³²⁾」ようである。

1766年 (ヒューム, 56才時) に, ヒュームは, ルソー (Rousseau) を伴って帰国することになるが, このヒュームとルソーの交友は, ルソーの猜疑心のため, 不幸な確執を生むことになっていく。

ルソーの猜疑心 (suspicion) について, B. ラッセルは「イギリスでは, 最初は何にもかもうまくいった。ルソーは非常な社交的成功 (social success) を収め, ジョージ3世 (George III) は, ルソーに年金を与えた…ヒュームはもっとも長く忠実だったのであり, ルソーを非常に愛していると公言し, 一生涯でも相互に友情と敬意をもちながら (in mutual friendship and esteem), とともに暮らせたかもしれなかった。[ところが] しかしこの時までにルソーは, 不自然ではなしに, 被迫害妄想 (persecution) に悩まされるようになっていて, そのことからついに正気ではなくなったルソーは, ヒュームが自分の生命を奪おうとしている陰謀の手先き (the agent of plots) ではないか, という猜疑心 (suspicion) をもったのである。時として彼〔ルソー〕は, そのような嫌疑のバカバカしさを悟り, ヒュームを抱きしめながら<いや, いや, ヒュームは裏切り者 (traitor) じゃない>と叫ぶのだった。これに対して, ヒュームは (疑い

もなく非常に当惑しながら) “なんですって! 親愛なるお方” (Quoi, mon cher Monsieur !) と答えていたのである。しかしついには、みずからの妄想 (delusion) に負けたルソーは逃げ去って³³⁾ ってしまったのだと説明している。また大島正徳氏は—— 1766 年 1 月, ルソーはイギリスに着く。「ルソーはヒュームの親切によって英国に身を逃れたのであるが、そのヒュームの温情を裏切って、彼を甚しく攻撃したのである。ルソーが迫害されたのは『エミール』 (Emile. 1762.) の出版からであって、フランスにすることができず、スイスに逃げていた。そのルソーをブフレ夫人 (Mme. Boufflers) が非常に推賞して、ヒュームに頼んで英国へ連れて行かしたのである。そして、彼はルソーに対しては信用をおいていたのである。快活な社交的な礼儀のある人物である、教養ある柔しい温かい心の持ち主である、などといって、ルソーを讃 (ほ) めていた。そしてロンドンでは、自分の家に住まわしておいたこともあり、王からは年に 100 ポンドの金をもらう約束をも作り、またダベンポート (Davenport) という人から、年に居宅費として 30 ポンドの金を貰うよう、ヒュームは取扱ったほどである。ところがある時のこと、ルソーはヒュームに手紙を送って、ヒュームは自分の名誉を毀損することを謀 (はか) っていた不屈者である、と手きびしく非難した。これにはさすがのヒュームも非常に驚き、非常に怒った。どうしてそんな疑いをルソーが持つことになったかという、ルソーの疑い深い、ひねくれた極端性の性質からきたものであるが、それはプロシャのフリドリヒ王の手紙という形で、ルソーの悪口が公にされた。ルソーはこれを見て、はじめはボルテール (Voltaire) の仕業 (しわざ) だと思ったが、それはワルポール (Walpole) の書いたものであるということを発見するに至って、それはヒュームのさしがねであると思ひ込むに至った。そして一遍 (いっぺん) そうと思えば、偏執的に思ひ込む性質なので、その眼をもって始終ヒュームの言動を観察すると、何につけてもヒュームはルソーを内々侮辱するつもりでおこなっているごとき

にも思われた。そこで、べつだん客観的証拠はないのに、こうと思い込んだ気持で、ヒュームに烈しい非難の手紙を送り込んだ。さすがのヒュームも驚かざるをえなかった。そこで今度はヒュームも、ルソーに対する見解を、すっかり取り換（か）えて、＜あんな腹黒い残忍な悪人は、嘗（かつて）みたこともない、あの男のために計ったことは真にみずからも恥じざるをえないことである＞と友達に語っている。しかし、それでもヒュームはフランス政府にルソーを保護してくれることを頼み、またダベンポートの約束金もルソーの年金として送るようにせしめている。この点は、ヒュームの紳士的行動として見上げなければならないことである。これは1767年のことであつた³⁴⁾と解説しているが、いずれにせよ「ヒュームが、ヴォルテールやダランベールと親しいことは、はじめから分っていたことではなかったのか。またヒュームの方も、どういう気でルソーの世話を引きうけたのか。どちらの側も軽卒のそしりはまぬかれ³⁵⁾」ないことと思われる。

ヒュームは、1767年（ヒューム、56才）時に、フランスから帰国したあと、ハートフォード卿の推薦で、国務次官（Undersecretary of State in London）を1ケ年つとめている。これは彼が事務的才能に恵まれていた人物であったことを示している。

1769年8月（ヒューム、58才時）に、彼は郷里エデンバラに隠退して「裕福な束縛のない人間として（als reichen und unabhängiger Menschen）引退生活（zurückgezogenes Leben³⁶⁾）」に入った。いまや彼は資産もふえ、恩給をあわせると、年1000ポンドの収入をえることができるようになった。静かな読書と旧友との親しい交わりのうちに、指導的思想家として満ち足りた生活を楽しむことができるようになった。セント・ディヴィッド街に面した彼の家には、アダム・スミスやウィリアム・ロバートソンその他、彼を師と仰ぐスコットランドの名士たちが集って、サロンの感があつたといわれる。

ただひとつ、例外として——「いわゆるスコットランド常識学派を代表するリード (Thomas Reid), とくにビーティー (Beattie, James) の攻撃をうけたことである。周知のように、彼らはヒュームの根本前提を批判して、それが必然的に懐疑主義に帰結することを強く指摘したが、なかんずくビーティー (Beattie.J.) のヒューム攻撃は執拗を極めた。ヒュームは彼らの誤解を主張し続けたが、直接論争に捲きこまれることを避けて³⁷⁾」通した。

1775年 (ヒューム, 65才時) 頃より身体の違和感を訴えるようになった。肝ぞう癌と直腸癌と推定される不治の病をえたが、「死に至るまで読書や友人との談笑を楽しんで快活さを失わず、死に対する恐れを示さなかった³⁸⁾」そうである。1776年、死ぬ少し前、ヒュームは自分の自叙伝を書いた。腸出血のあと、自分の余命がいくばくもないと感じたからであった。『自叙伝』は伝えている——「1775年の春、私は突然、腸のぐあいが悪くなった。最初は、たいしたことはあるまいと思っていたが、いま思えば、以後それは致命的なものとなり、不治の病になった。いまでは、私は死が早く到来するのではないかと思っている。病気の苦痛はほとんど感じられない。さらに不思議なことは、身体のほうが大変衰弱しているのに、精神のほうは、いささかも衰えを見せない。そのため、もし私が生涯のうちで、もう一度、過ごしてみたい時期をあげよ、といわれたら、私は、この晩年を指したいと思うかも知れない。私は以前に劣らず旺盛な研究心を持っているし、人中 (ひとなか) にいても、相変らず陽気である。また65才にもなる男が死んでも、たかが老いぼれた数年の才月を失うにすぎない」と述べている。

病気は、1775年のタッタの1ケ年で肥満していたヒュームの体重を70ポンドも減らしてしまった。彼はブフレ夫人 (Mme. Boufflers) あてに手紙を書く「私には不安も後悔も感じられず、除々に死が近づいてくるのがわかります。心からの愛情と尊敬の念を抱いて、最後のお別れを申上げ

ます」と極めて冷静に書いている。ヒュームの最後の時期に「訪問したボズウェル (Boswell) の明るい物語が残されている。ボズウェルは、靈魂の不滅の問題にヒュームを誘いこんだが、かれは自己のさし迫った死に、完全に静かに直面することができる人間をみいだして³⁹⁾」驚いたそうである。

1776年8月25日、午後4時、ヒュームはエジンバラで歿した。大雨だったが、葬儀には多数の人が参列した。彼の遺体は、カルトン丘 (colton-hill) に葬られた。享年65才。墓碑銘は簡単に“ディヴィッド・ヒューム”と記されている。

『自叙伝』 (My own Life), 『自然宗教にかんする対話』 (Dialogues concerning Natural Religion) 『自殺について』 (Of Suicide) 『靈魂の不滅について』 (Of the Immortality of the Soul) 等の遺稿が残された。

注 1) Emile James, Histoire sommaire de la pensée économique, 4^e éditions Montchrestien, Paris, 1969. P.59. 邦訳78頁。

2) ibid., P.60. 邦訳78頁。

3) ibid., P.60. 邦訳78頁。

4) ibid., P.61. 邦訳79頁。

5) ibid., P.60. 邦訳79頁。

6) ibid., P.60. 邦訳79頁。

7) ibid., P.61. 邦訳80頁。

8) 渡辺輝雄「重農主義」(『経済学大辞典』Ⅲ. 昭和55年, 東洋経済新報社, 437頁所収)・印引用者。

9) E.Heimann, History of economic doctrines, Oxford University Press, 1962, P.44. 邦訳74頁,・印引用者。

10) ibid., P.45. 邦訳75頁。

11) E. James. op. cit., P.47. 邦訳56頁。

12) 南亮三郎『人口政策』昭和50年, 千倉書房, 118頁,・印引用者。

13) E.Heimann, op. cit., P.89. 邦訳142頁,・印引用者。

14) 南亮三郎『人口論』三和書房, 昭和29年, 66～67頁,・印引用者。

15) Alasdair MacIntyre, Humes' Ethical writings, 1965. P.10.

16) 杖下隆英『ヒューム』1982年, 勁草書房, 3～4頁。

17) 大槻春彦「イギリス古典経験論と近代思想」(『世界の名著』27. 中

中央公論社，昭和 55 年 30 頁所収)

- 18) H.J.Störig, Kleine Weltgeschichte der Philosophie, Neunte Auflage, W.Kohlhammer Verlag, 1963, S.244. 邦訳(下巻) 23 頁。
- 19) 大島正徳『ヒューム・人性論』昭和 10 年，岩波書店，4 頁，・印引用者。
- 20) B.Russell. History of Western Philosophy. George Allen & Unwin LTD. London, 1962. P.634.
- 21) 大島正徳 前掲書，11 頁。
- 22) 同書，12 頁。
- 23) 大野精三郎『歴史家ヒュームとその社会哲学』1977 年，岩波書店，18 頁。
- 24) 大島正徳，前掲書 7 頁。
- 25) 同書，14 頁，・印引用者。
- 26) 同書，19 頁，・印引用者。
- 27) B.Russell, op.cit., P.634. ・印引用者。
- 28) 杖下隆英，前掲書，7 頁。
- 29) 同書，7 頁。
- 30) 大野精三郎，前掲書，20 頁。
- 31) 杖下隆英，前掲書，9 頁。
- 32) 同書，9 頁。
- 33) B.Russell, op.cit., P.684.
- 34) 大島正徳，前掲書，24 ～ 26 頁。
- 35) 桑原武夫編『ルソー』岩波新書，1976 年，167 頁。
- 36) Störig, op. cit., S.244.
- 37) 杖下隆英，前掲書，11 頁
- 38) 同書，11 頁。
- 39) 大野精三郎，前掲書，23 頁。

与えられた紙幅の都合上，次号で，ヒュームの思想について述べることにしよう。